



第 12 回

「スイミング・プール」

レアンドロ・エルリッヒ

コンクリート、ガラス 高さ280×幅402×奥行697cm

2004年 金沢21世紀美術館蔵

©Leandro Erlich

撮影：渡邉修 画像提供：金沢21世紀美術館

※「美術1」P66に掲載

錯覚する喜び

美術館に行ったときに、「周りの鑑賞者たちが邪魔だな」と思ってしまふことがある。自分より前にいる鑑賞者たちがちらちら目に入ってきてしまふ作品に集中できなかったり、ガラスなどに自分や周りの人たちの顔が映ってしまふ作品ではないものに気を取られたりする。

しかし、レアンドロ・エルリッヒの「スイミング・プール」は、鑑賞者たちも作品の一部だ。ガラスの上に10センチの水が張られているだけというが、上から作品を見ると、下にいる鑑賞者たちが水底にいるように錯覚する。また、コンクリートが水色に塗られた、プールの底のような下の場所に入ると、上にいる鑑賞者たちがプールの縁からこちらを覗き込んでいるように感じられる。鑑賞者同士で見つめ合うことになる。ゆらゆらと顔が動いて面白い。美術館で鑑賞者たちを見ることを楽しん

でもいいのだな、と驚く。ひとりだけで対峙するよりも、たくさんの人と一緒に見る方が面白い美術作品は希だ。

人間は、常に他人を認識したくてたまらない。私が金沢21世紀美術館に行ったとき、たくさんの大人と子どもが「スイミング・プール」の上と下ではしゃいでいた。友だち同士で、一人を下に残し、もう一人が上に行つて、手を振り合っている人たちもいる。

いつだって、間に何かを挟んで、人は手を振り合う。駅のホームに立って、向かいのホームにいる友だちに。マンションの5階のベランダに立って、学校へ行くために道路に出た子どもに。人と人とは、ぴったりくっついたり、的確に相手を認識したりするときよりも、何かを挟んでぼんやりと相手を認識するときの方が盛り上がるのかもしれない。

私は夫と共に「スイミング・プール」を鑑賞し、やはり、上と下に別れて手を振り合った。まるで、竜宮城の乙姫様と浦島太郎のような気分になった。

「一番低いところが一番高い場所につながっている」と大学で習った。『御伽草子』の授業だった。「だから、浦島太郎が行ったのは、海底ではなく、天上なのだ」と。実際、こうして手を振り合っていると、どちらが上でどちらが下かわからなくなってくる。水の下の世界の方が明るいのだ。

そして、乙姫様と浦島太郎は、コミュニケーションをうまく取ることができず、別れ別れになった。

人と人との間には、常にこのガラスと水のようなものがあり、私たちはお互いを正しく認識することができない。だからこそ盛り上がるのだ、としみじみ思う。

山崎ナオコ
やまざき・なおこーら

作家。1978年 福岡県生まれ。
國學院大學文学部日本文学科卒業。
2004年、会社員をしながら書いた
『人のセックスを笑うな』で第41回文藝賞を受賞し、
作家デビュー。『浮世でランチ』
『カツラ美容室別室』『ニキの屈辱』
『昼田とハッコウ』『ネンレイズム／開かれた食器棚』
『指先からソーダ』『かわいい夫』
『美しい距離』など、著書多数。